

大運河が見える

大橋一夫

携帯電話で「正門が封鎖されている」との連絡が入ったので、わたし達を乗せたワゴン車は、いつもの交差点を右折せずに直進した。電話があつてから、なんと説明しようかと考え巡らせたが名案は浮かんでこなかった。日本からの二人の来客は、中国語がわからないのでまだ事態に気が付いていないだろう。

車はそのまま進み運河沿いの産業道路に入った。新しく造成された広大な工業団地の幹線として整備され、片側三車線ずつを分ける中央分離帯のサツキの常緑とグランドカバーのパンジーがほどよい色彩のコントラストを見せている。両側のグリーンベルトも広く取られており、道に沿って三列に植えられている街路樹のエノキは見事に剪定されている。人件費が安い中国ならではのと思わせるとともに、『山紫水明』のような自然を尊ぶ精神が現代にも受け継がれていることを語っている。

ワゴン車の左側の窓から引船に引かれ貨物を満載し喫水を船縁ぎりぎりにした三隻の貨物船が対向してくるのが見える。夜勤で製造された製品の集配に忙しいのか、たくさんのトラックが行き交う朝の時間帯、ワゴン車は運河沿いにさらに南進した。黄砂の季節のため、まだ新しい舗装ではあるにもかかわらず、車両の通行によって砂埃がおこり、『二輪車専用レーン』を電動自転車通勤に向かう人々の大半はマスクを付けている。

四方どちらを見渡しても全く山が見えない平らな大地を産業道路に沿って走る『京杭運河』は、今から約1,500年前に建設され、800年前には今日とほぼ同じ規模で完成した全長2,400キロの大運河である。杭州に発し、揚子江や支流を利用しながら黄河に達し、その支流をさらに北上し、最終的には北京に到る水上輸送路である。中国の大河は、ほとんどが西の山岳地帯に発し東の太平洋に向かって流れている中で南北間の貴重な輸送路として長年に亘り人々の生活を支えてきた。今でも100トンくらいの貨物船が自由に対面通行できる河幅があり中国の経済発展に寄与している。

「アイリスさん、先月来たときは先ほどの交差点を曲がったようですが・・・」

吉川良介からの当然の質問に対して、わたしは本当のことを言うしかないと思を決した。

「会社の正門前に数十人の群衆が押し寄せているので正門が封鎖されているとのこと。二時間もすれば収まるでしょうから、それまで近くにある世界遺産の『同里』^{とんり}に行つて観光で時間をつぶしましょう」

「超速パソコン株式会社」取締役製造部長の後藤浩一と品質保証部長の吉川良介の二人が、わたしが営業部員として勤務する「東華電脳公司」を訪問するのは一月前に続いて今回は二回目である。

パソコン製造には多くの人手が必要で、人件費が高い日本国内での製造ではもはや競争力が無く、最後まで日本国内製造で頑張っていた「超速パソコン」も時代の流れには逆らえず中国生産に切り替えることを重役会で決定した。ただし、中国製が日本製と同じ品質で製造できるかどうか慎重に見極めることが必須であり、彼ら両名に特命で調査させていた。日本国内の工場を閉鎖し中国生産に切り換えた後になって品質の低下を招くことになれば、『品質に対する目

が肥えた日本の消費者』から見放され会社の存亡にかかわることになる。

先月の訪問では、その一環として「東華電腦公司」を訪れ「見積依頼書」と「品質要求書」を持参し内容を説明した。訪問した中国の会社は、ほかに四社で、わたしの会社を入れて合計五社とのことであった。五社のすべてが見積もりを提出すると想定し、見積もりの良かった上位二社を再度訪問し、さらに検討を加え、最後に残った一社と契約する、と先月の訪問時に説明されていた。取引規模は年間200万台のパソコン製造であり、受注すれば、「東華電腦公司」の年間売上高は現在の五割増になるはずで、会社として全力で対応すること決定し、営業部門を中心にして関連部門による連日の長期間残業の末、英文100ページにも達する「見積書」と「品質説明書」を作成し提出していた。蓄積した疲労と見積結果に対する不安感で資料提出後も日常の勤務にも身が入らない日々が続いていた。

週末には、重慶大学時代からの恋人で、蘇州にある「東華電腦公司」に、わたしよりも半年前に転職し生産技術部員として働いているクリス・陳と逢い、人民路にある「四川餐厅(食堂)」で食事後、彼のアパートに泊まった。クリスは、いつものように軽いキスから始まり、女性のように細くて長い指先で、もっともわたしが感じやすい左の乳首を軽く愛撫し、さらに足の付け根の敏感なスポットに対し穏やかさと激しさを交互に繰り返しながら執拗にわたしの体を燃え上がらせようと努力してくれたが徒労に終わった。以前はこんなことは無かったのに、このところ三回ほどは、このような不完全燃焼が続いていた。その原因が疲労だけではないことをそのとき初めて悟ったような気がした。わたしは日本語と英語ができることから海外営業担当に配属され、日本や欧米の顧客と接する中で『解放経済』の意味が徐々にわかるようになってきていた。「等しく貧しかった時代」からの急激な解放が、クリスが目指しているような『拝金主義』を多くの中国人にもたらした。わたしもお金がほしい。お金があれば、来客の日本人の全てがそうであるように家も自動車も買うことができるし、自由に海外旅行を楽しむことができる。わたしはまだ海外に行ったことがない。でも日本人は、お金のためだけに働いているようには見えない。クリスはこれに気が付いていないようだ。

今から一週間前、わたしは後藤浩一からの電話を受けた。

「アイリスさん、この前の訪問ではお世話になりました。11月25日に再度お伺いし、提出して頂いた資料について詳しくご説明していただきたいと考えています。」

「うあわー、上位二社に入ったんですね。ありがとうございます。それで、当社は一番だったのでしょうか、二番だったのでしょうか。」

「まだ検討中で、詳しくは申し上げられませんが、今度の訪問では資料を提出した全ての会社に行くわけではありません。状況はお察しいただけると思いますが・・・」

早速、営業部長のジャック・宋に報告すると、「彼らの最初の計画どおり上位二社に絞られ、我が社が残ったに違いない。今度の訪問で最後の決着をつけるはずだから、万全の準備をしよう」とジャックはいい、ただちに来客の受入準備をはじめた。

彼らは前日の二十四日夕方に「中国東方航空 504便(JAL 5100便と共同運行)」で成田から上海浦東国際空港に到着するので、社有車の中でもっとも高級な「上海GM社製のワゴンGL8」を予約し、営業の後輩で若くて才能のあるニコル・江を国際線到着ロビーに出迎えに向かわせることにした。彼女は日本語ができないが、名門、上海復旦大学卒で英語が上手で、蘇州までの二時間の車中で提出資料に関する話題が出てうまく対応してくれるだろう。

ホテルは、前回の訪問時に後藤浩一は海外出張経験が豊富で、アメリカにも三年間の駐在経験があり、特にアジアの国々に対してはビジネスだけでなく文化・歴史に対する造詣が深いことが判っていたので、彼が好みそうな『網師園』など、歴史的な庭園が近くにたくさんある、十全街の「南林飯店」に予約を入れた。近くには、「蘇州料理」、「四川料理」、「広東料理」、「新疆・ウイグル料理」など、様々な中国料理の餐厅があるので、彼らの好みの食事に合わせることができる。訪問目的は、「提出資料の説明」ということになっているが、工場見学が含まれるのは当然なので、工場の整理整頓も済ませておくよう工場長に依頼した。また、当日の話題の焦点の一つは「品質」なので品質部長は二四日の会議には終日出席できるように、他のスケジュールをすべてキャンセルさせた。会議室は窓からの眺めの良い三階の大会議室を予約した。来客をリラックスした雰囲気させることも会議を成功させるひとつの要因であろう。

『同里欢迎你（「同里はあなたを歓迎します」の意味）』と書かれた横断幕が掲げられているゲートをくぐってワゴン車は駐車場に入った。ウィークデーの午前中のせいか他の観光客はほとんど見あたらない。11月の蘇州地方は一年のうちでもっとも過ごしやすいシーズンで日本からの来客にとってもスーツの上にも何も羽織らなくても丁度良い快適さであろう。車を降り、執拗なおみやげ屋の呼び込みを無視しながら湖畔まで足を伸ばした。わたしは、大学で習った日本語と英語を生かす職業として、卒業後は四川省の観光会社に就職し、外国人相手の観光ガイドをしていたので日本人の趣向や考え方をよく知っている。

「同里は街と運河が一体化している水郷の街で、900年の歴史があります。60%以上の家々は明・清時代の建物です」。わたしはガイド時代を思い出しながら手慣れた調子で説明を始めた。目の前の水路に沿う白い漆喰の壁と黒い屋根瓦の家々には船着き場が備えられ、自動車がない時代には効率的な交通手段となっていたことをうかがわせる。ところどころ水路を横断する橋は、白っぽい御影石造りで、橋の真ん中が上方に大きく弧を描き、背の高い船でも下を通ることができるよう工夫されている。水路を挟んだ家並の向かい側は歩道となっていて街路樹には柳が植えられている。枝から落ちた何枚かの葉が水面でわずかに風に揺られ、静かな景色のなかにも動きを演出している。

駐車場への帰り道、まだ時間があつたので、おみやげ屋が並ぶ商店街に立ち寄った。古道具屋の店先には古ぼけた『二胡』が置いてあつた。後藤浩一は興味を持ったのか手にとってしばらく眺めていたので声をかけた。

「値段を聞いてみましょうか」

「いや、太鼓の部分に蛇の皮が張ってあり税関で没収されるでしょう。ワシントン条約は日本でもうるさくなっています・・・娘が沖縄の『三線』^{さんしん}を習っているので、いいおみやげになると思ったのですが・・・」。結局、後藤は隣の店で、妻と娘のために『太湖産天然黒真珠』のネックレスを二本買った。

吉川良介は、印鑑屋で印材を選んでいた。同里は、ここから約20キロ先の同じく世界遺産に登録されている周庄よりもマイナーで、それほど観光地化されていない。売っているおみやげも安いものが主体で、象牙のような高価な印材は置いてなかった。吉川は迷った末に翡翠の端材のような緑色をした石の印材を選び、紙に「吉川」と書いて店の人に渡した。彫刻士の若い男は、印面に下書きもせず小型の彫刻刀でいきなり彫り上げてしまった。吉川良介は、「いやー、中国の人は器用なんですねー」と驚嘆の声を上げ、試しに捺印した書体に満足した。

ワゴン車は予定より二時間遅れで会社に到着した。正門は、封鎖騒ぎなどなかったかのように平穏で、いつものように両側に警備員が立ち電動フェンスで閉じられていた。助手席に座っているジャック・宋を認めると警備員はスイッチを押し正門のゲートを開いた。

「まるでE T Cのように素早い動作ですね。」と吉川が感心した。「中国人は、徴兵制で訓練されているので、このようなルーチンワークはよくやりますよ」とジャックが答えた。

会議は、幹部との名刺交換に始まり、総経理（社長）のヘンリー・林が短い「歓迎の挨拶」を行った後、二時間の時間ロスを取り戻すべくただちに本題に入った。冒頭、後藤より、「提出して頂いた資料は社内関連部門で充分吟味させて頂きました。今日は、書いてある内容そのものよりも、それが実際に履行されているのかどうかについて、事務と製造の現場に行って検証することを主体に進めたいと思います」との発言があった。わたしは内心、〈しめた〉と思った。資料作成時に、メンバーに対して「日本人はウソを嫌うので、決してウソを書かないように。中国人が好きな誇張した書き方も良くないので、事実を淡々と書くように」と再三にわたって注意を喚起してきたことが報われると思った。

後藤らの現場検証作業では、大きな問題点もなく午後四時には終了し、後藤の「ご講評」も好意的であり、受入側としては成功といえるだろう。わたしは〈ホッ〉として、窓から外を見やると、水面のさざ波が夕陽を反射し煌めいている運河を三隻の船がロープで結ばれ一団となって南京の方向に進んでいくのが見えた。〈あの船の歩みのように、ゆっくりではあるが着実に仕事を一歩進めることができた〉と感じた。ただし営業部員としては、今夜はこれから、「会食、接待」という大きな仕事がまだ残っている。

「ところで、今朝の『正門封鎖』は何だったんでしょう？」と、後藤が切り出してきた。ジャックは、あらかじめ回答を考えていたのか、すらすらと回答した。

「二・三週間前に幹部社員がマイカーで交通事故を起こし、歩行者に怪我をさせてしまいました。今朝は、被害者の親戚などが大挙して会社に押し寄せ補償金の要求に来ました。野次馬も加わって数十人の群衆になり、やむを得ず正門を封鎖しました。通勤時の事故ではないので、会社は補償する義務はないのですが、中国ではよくある話です」

「それで、どうやって解決できたんですか」と後藤はまだ疑問が解けないことを表した。

「不法な要求ですし、無届けのデモと同じですから警察に来てもらいました」

「その程度で収まったんでしょうか」

「被害者自身にも補償金の積み上げが渡るように約束しました。中国では結局は金の力にモノを言わせることもあります」。ジャックは、ここをうまく切り抜けた。わたしは、それ以上この問題に触れられないように、すかさず会食の話題に切り換えた。

「無事会議も終わりましたので食事に行きましょう。先月のご来訪のときは『上海蟹』でしたね。今日は何かご希望がありますか？」。このような場合、たいていの来客は中国料理をよく知らないこともあり、「お任せします」と言うのが通例であるが、さすがに後藤は中国に旅慣れていた。

「そうですね、新しいものにチャレンジしたいですね・・・昨晚、ホテルに向かう車から『新疆料理』と書いた看板を見かけました。これにしませんか。」

「羊肉料理で、少し臭いがあるため日本の方は嫌われることが多いのですが、よろしいですか」。

「吉川君、君は何回も韓国に出張したことがあるので、臭いのキツイ料理も平気だろう。韓国料理のニンニクと羊では臭いが違うが・・・」。吉川は苦笑しながら「Welcome です」と英語混じりに答えた。

「少し窮屈ですが、一台の車の方がいいでしょう」と総経理のヘンリーが言いながら、運転手を入れて総勢7人のメンバーをワゴン車に案内し、十全街にある『烏魯木齊^{うるむち}餐厅』に向かった。蘇州は今から2,500年前、春秋戦国時代の『呉』の首都として建設され、その旧市街は四方を運河で囲まれ外敵の侵入を防ぐよう作られており『蘇州城市』と呼ばれている。それは、中国の長い歴史の中でも大きな破壊を受けずに、往時の街並みがよく保存されてきたためらしい例となっている。ワゴン車が、城市東側の運河に懸かる大きな橋を渡り旧市街に入ると、街路樹がプラタナスに変わった。今年の夏は暑かったせいか落葉していなく、やや黄色に色づいた大きな葉をまだいっぱい付けた樹々が西陽を受けて地面に長い影を落としている。

「中国の剪定方法は独特ですね」と韓国通の吉川が話しかけてきた。

「そうなんですか。わたしはまだ若いので樹木のことはよくわかりませんが・・・」

「プラタナスは、日本や韓国でもよく街路樹として使われていますが、真ん中の一番太い幹を切ってしまって横から二・三本の幹を外側に出させる剪定方法は、中国で始めて見ました」

ワゴン車は、干将東路を西に進み、人民路を左折してまもなく、十全路との交差点角にある『烏魯木齊^{うるむち}餐厅』に到着した。わたしは、運転手に「二時間ほどしたら食事が終わるので、その頃この駐車場に戻ってくるように」と指示して、彼にしばしの休息時間を与えた。

餐厅の建物は、清時代の集合住宅の内部を改装したとのことで、煉瓦と漆喰で作られ、一階と二階の中間に飛び出した庇と二階の大屋根は昔風の中国瓦で葺いてあった。玄関に入ると、白色と青色が半々になった手織布のような生地で作られた新疆の民族衣装を着た、すらりと背が高い、あきらかに漢族ではないウェイトレスが、「歡迎光臨」と言って迎えてくれた。わたしは、「東華電腦、六位（6名）」と言い、電話で予約しておいた回転テーブル付きの個室に全員を案内した。席は、上座に後藤、その左隣に総経理のヘンリー、右隣に製造部長のピーター、以下、吉川、ジャック、わたしの順番とした。わたしの席は入口に近くなり注文に便利な上、後藤の正面となり会話をするのには都合が良い。

先ほどのウェイトレスが注文を取りにやってきた。年齢は35歳くらいであろうか、スッピン丸顔は色白で少しソバカスがあり、目の位置が漢族よりも奥まり、鼻は横幅が狭く鼻梁は上から下に向かってやや外側に張り出し、唇は淡いピンクで、年齢相応で体にはやや贅肉が付いているが、女性のわたしから見ても「漂亮^{びやおりかん}（美しい）」と言える人だろう。新疆・ウイグル地域は、有名な敦煌を有しシルクロードの中継地として東西の交流が盛んであったので混血によってこのような佳人を生み出すのであろう。彼女は訛りのある北京語でわたしから料理の注文を聞いた。わたしは、「羊肉の中国式シャブシャブ、ダシは唐辛子味でやや辛めに」、「羊肉と羊レバーの串焼き」、「子羊のスペアリブ」、「天山産キノコと鶏肉の煮付け」、「新疆式ナン」を注文した。

「お酒は何にしましょうか？」とわたしは来客の好みを聞いた。

後藤は、「やはり最初はビールですね。『青島^{ちんたお}』で行きましょう」と言った。

「新疆には、羊の乳から作った有名な蒸留酒がありますので、ビールの後に注文しましょうか」と答えた。後藤も吉川もこの酒のことは知らず、興味を持ったので、一リットル入りのボトルを注文した。

ビールで乾杯した後、次々と運ばれてくる料理は、どれも香辛料がきいており、その辛さ故か食欲が進んだ。「新疆式ナン」は、本場インドと同じく「ナン」と発音するが、味は異なっている。粉は粗挽きで表面には胡麻がまぶしてあり噛みしめると微妙な甘みが出てきて美味しい。羊乳酒が運ばれ無色透明の酒が全員のウィスキーグラスに注がれ、二回目の乾杯の準備がととのった。匂いは中国の一般的な「白酒（焼酎）」と同じで、とくに乳臭い感じはしなかった。この酒を飲むのは初めてだが強い酒とのことなので少しだけ口を付けるとアルコール度三八%が舌を強く刺激し、同時にかすかな乳の味がするのを感じた。

酒が進み、会話の内容は冒頭のビジネス中心の堅い話からくだけてきた。後藤は羊乳酒のグラスを置きながら、正面に座っているわたしの方を見て、

「アイリスという名前は誰が考えたのですか」と尋ねた。

「大学を卒業するとき自分で考えました。本名は林虹悠^{りんほんよう}と言います」
中国で外国とのビジネスにかかわる人は、西洋式のファーストネームを名刺に書き呼びかけやすくしている人が多い。わたしも旅行社に就職するにあたりいろいろ考えた末、好きな花である今の名前を付けた。

「ところで、アイリスさんは面長の顔立ちで四川省生まれの人のように見えないですね」

「祖父が吉林省の長春から四川省成都に引っ越してきましたので・・・」

「ほう、吉林省ですか。北方系だから背が高いわけですね。やっとアイリスさんの謎が解けました」

「わたしは漢族ですが、吉林省には満州族。朝鮮族も多く住んでいます」

「私も日本人としては背が高い方ですから、中国に来ると『山東人』に似ていると言われたことがあります」と後藤が答えた。

「祖父は満州国時代の『新京放送局』に務めていて、李香蘭を知っていたそうです」

祖父の林偉克は、1916年ハルビンで生まれ、上海にあった東亜同文書院を卒業後、満州の新京放送局に就職し、森繁久弥らとともに多数のラジオ番組の原稿書きや、演出を経験した。満映理事長の甘粕正彦からも目をかけられ、李香蘭もよく知っているとのことだった。しかし、実態は八路軍^{ばーろーちゅうん}へ満州国情報を流す諜報員の役割をはたしていた。解放後も文筆活動を続け、朝鮮戦争のときには従軍作家として参加したこともあり、その後も文芸誌である『人民文学』の常連ライターであったが、文化大革命が始まって間もない1966年、『日本の放送局に務めた反革命分子』とのレッテルをはられ全く反論の機会を与えられないまま一方的に四川省成都に下放された。そこでは小さな印刷屋で文選工として勤務し、ときどきはチラシ広告の文案作成など過去の業績からは考えられないような仕事しか与えられなかった。それでも創作をやめず、発表の機会が望めないまま、わたしの父のために少年向け冒険物語などを書いていたそうである。当時、父の林星輝は中学三年で高校進学を果たすことができず、やっと機械工場に就職することができた。1975年に文革が終わり祖父の名誉が回復したが、父は中卒ながら頭角を現していたので、そのまま公司にとどまり、今は「重慶輸送汽車公司」の幹部となっている。

昔は、大学の授業料がきわめて安く、能力のある人はほとんど誰もが大学に進学できたが、現在は国立大学でも授業料が高く、農民の子弟はよほどのことがないかぎり進学できない。これも『開放経済政策』によってもたらされたことの一つである。わたしを大学に通わせることができたのは、父が運良く昇進できたからであろう。

「ほう、李香蘭ですか、山口淑子さんですね！戦後、国会議員にもなられた有名な方です」

「はい、観光ガイドをやっていたときのお客さんが、日本から森繁久弥さんや山口淑子さんが掲載されている週刊誌を送ってくれたことがあるので知っています」

「李香蘭が出たところで、食事が終わったら彼女の大ヒット曲「夜来香」^{いらいしやん}を歌いにカラオケに行きませんか」と、わたしは食事の次のステップである「接待」にさりげなく誘導した。

「いいですねー。是非連れて行ってください。明日は無錫に行かなくてはならないので遅くならないようにしないとイケませんが・・・」と後藤が答えた。

わたしは「無錫」というキーワードから、彼らが訪問するもう一社は「旭輝電子公司」であることを確信した。この会社とは見積ではいつも競合するが、三対二くらいで勝つことが多いので、<このプロジェクトを受注できるのだろうか>と今まで抱いていた危惧が少しだけ安心感に変わった。

「無錫でしたら近いので問題ないと思います。カラオケでは日本の人が大好きな『無錫旅情』を一緒に歌いましょう」とわたしはダメ押しした。

餐厅の駐車場には指示したとおりワゴン車のGL8が待っていた。運転手に、「工業園区の『金都歌庁』と行き先を指示した。このカラオケ店はいつも接待で使うので運転手はよく知っている。彼は気を利かせて最短のコースではなく遠回りしてライトアップしていて蘇州城市内でも夜景が一番美しい運河沿いの道を通って来客の眼を楽しませた。ワゴン車は大通りから工業園区の中でも有数の歓楽街となっている「黄天街」に向かって左折すると道の両側には、たくさんの餐厅やガラス越しにピンクの照明が見える理髪店が軒を連ねる街並みに変わった。理髪店の中では客待ちの小姐^{しやおちえ}がピンクのユニフォームを着て椅子に腰掛け、手持ち無沙汰に通りを眺めていた。この種の店は「理髪」だけではなく、料金に応じた特殊サービスをすることで有名であるが、今回のような重要な客を案内するわけにはいかない。客によってそのような接待を好むときは別の営業部員に案内を任せることになる。女のわたしが案内するわけにはいかないが・・・V。工業園区には、台湾系、韓国系、日本系などの会社が多く、黄天街に遊びに来るのは100%それらの関係者である。日本料理や韓国料理の餐厅も多いが値段は高く、中国人だけのグループはまず見かけない。ワゴン車が道の突き当たりを右折すると五階建てのビルの側面にネオンサインによる大きな『金都歌庁』の文字が見え目的地に着いたことがわかった。ガラス戸の玄関を入るとチャイナドレスを着た10人くらいの小姐^{しやおちえ}が一斉に「いらっしゃいませ」と日本語で出迎えた。来客の服装から日本人だということが判ったようである。わたしは、「東華電腦、六位」と言い、できるだけ広いカラオケルームにしてもらうようマネジャーらしき女性に頼んだ。

カラオケルームに入り、シーバスリーガルのボトルを注文した。後藤は、「中国で出されるシーバスリーガルの90%は偽物だと聞いています」と言った。ジャックは、「へえー、そうなん

ですか」と苦笑した。全員、先ほどの羊乳酒で出来上がっているの、酒の銘柄は何でもかまわなかった。今まで上役の後藤に気兼ねして、あまりしゃべらなかつた吉川はカラオケが好きなのか急に元気が出てきたようで、リモコンを取ると、次々とリクエストした。この店は日本人の客が多く日本語の曲が豊富で、彼のおかげで曲を絶やすことなく場をもたせてくれたので助かった。わたしも雰囲気盛り上げるため『時の流れに身を任せ』を日本語で歌った。この曲の中国語版の題名は『我只在乎你（私の大切なあなた）』と訳され、同じくテレサ・テンが歌い中国でも大ヒットした。テレサ・テンは、日本では台湾人として認識されているそうだが、北京で生まれ戦後両親と共に台湾に渡った外省人なので中国でも絶大な人気があった。若くして亡くなってしまったが、亡くなる二ヶ月ほど前からは、『何日君再来（いつの日君帰る）』しか歌わなかつたそうである。彼女の中国名は「鄧麗君」であり、「君」の文字が入っているので死期を悟った彼女がその意味を込めて歌ったのであろうか。

二時間ほどたち歌い疲れ、帰る時間となった。総経理のヘンリーが来訪のお礼を述べわたしが通訳し、お開きとなった。

「遠いところお越しいただきありがとうございました」

「ありがとうございました。近いうちにまた訪問できるようになりたいですね」と後藤が答えた。わたしは八再訪が実現するのは受注した時だ、と後藤の顔色をうかがった。相当飲んだにもかかわらず彼の視線はしっかりとヘンリーの眼を捉えており、このプロジェクトを東華電腦会社に発注する期待感を持たせてくれた。

後藤たちが日本に帰ってから初めての日曜日、クリスと逢うことにし、待ち合わせ場所は干将東路の茶館にした。このところ急に気温が下がり、二ヶ月前までは猛暑だった蘇州の街もプラタナスが完全に落葉し急激に冬の様相を示している。約束の時間まで余裕があったので目的地の一つ前の停留所でバスを降り、茶館までの二〇分の散歩を楽しみながらクリスに対する言い訳を考えていた。茶館は中国茶を出す「中国式喫茶店」であるが、最近はコーヒーも置いている。茶館に着くとクリスはすでに席に座って「鉄観音」を飲みながら待っていた。最初はとりとめもなくお互いの身近な出来事を話し合っていたが、わたしは思い切って本題を切りだした。

「仕事が忙しくなってきたので、もうあなたと逢うことができなくなりました」。クリスは不意をつかれ持っていた湯飲茶碗をガチャンと音を立ててテーブルに置き、「なぜ？」と言ったきり、しばしの沈黙が流れた。最近のわたしの態度から別の男ができたのではなく、本当に忙しいことを彼はわかっていたが、それだけが別離の理由ではないと疑っており、わたしに対し何回も再考を促した。わたしは本当の理由を彼に伝え説得する自信がなかつたので、最後まで「多忙」で押し通した。彼も友人を通して新しい金儲けの話が来ているらしく、結局、意外なほどあっさりとな得し、

「俺も新しい仕事を始めようとしているので忙しくなりそうだ。これっきりにしよう」と言った。勘定を済ませ、茶館を出たところで、お互いに「再見（さようなら）」と言って、彼との最後の逢瀬は終わった。

さらに一週間で過ぎた頃、わたしは日本からの電話を受けた。

「超速パソコンの後藤です。先日の訪問では大変お世話になりました。例のプロジェクトを東華電腦さんに発注することが昨日の取締役会で正式に決まりましたので、とりあえず電話でお知らせします」

わたしは、先日の訪問の時の彼らの挙動から受注の可能性が高いとの心証を得ており、心の

準備ができていたにもかかわらず、現実に決定の知らせを受けると気分が舞い上がってしまいなんと答えたかよく覚えていない。受話器を置いてから、ジャックへの報告のためにメモを見ながら次のように電話内容をまとめた。

書類審査では、東華電腦と無錫市にある旭輝電子との総合得点は全く同じであったが、両社への再訪問の結果をふまえ最終決定した。

両社の大きな違いは提出書類に書いてあることの真実味であった。旭輝電子の書類では、将来実施する予定が多く書いてあったのに対して、東華電腦の書類は、すでに実施していること書いてあり信用できる。

「正門封鎖」に対する対応が手際よかったので、「予期せぬ異常事態に対し柔軟に対応できる」ことを示した。

契約書を二部送るので、東華電腦会社の代表者の捺印をしたものを持参して日本での調印に参加して欲しい。

一週間後、わたしは上海発の中国東方航空501便の左側36A席に座っていた。隣の36B席にはジャックが座り、前方のビジネスクラスには契約書を持った総経理のヘンリーが乗っている。この便はJALとの共同運行で日本人乗客が多い。離陸してまもなくフライトアテンダントが機内食を配り始め、「Fish or Pork?」と客の好みに応じている。わたしの番になったとき、日本人のふりをして日本語で「ウナギご飯」と答えた。先に食べ始めた人々から、匂いが漂ってきていたので、Fishはウナギのことだと判っていた。一時間が経過した頃、窓から陸地が見え始めた。<初めて見る日本だ！ なんと山が多い土地なのか！>。機内誌に掲載されている地図と見比べていると時間が経つのが早い。エアバスA300-600型機のエンジン音が低くなり着陸態勢に入ったとのアナウンスがあった頃、まだ冠雪していない富士山が見え始めた。

あと30分で成田空港に着陸する。そこから成田エクスプレスに乗り換えると一時間で赤レンガの東京駅に到着する。新京の放送局勤務時代に出張で訪れたことがある祖父から優雅な姿の東京駅のことを聞かされていた。まもなくわたしは日本の土地に第一歩を踏み出す。それは中日の経済交流にわたしの人生をかけることにした第一歩となるはずだ。

了

(原稿用紙33枚相当 2004年)